Tsukuba Psychological Research
1986, **8**, 81-86

児童における援助行動と動機について

筑波大学大学院（博）心理学研究科　渡辺　弥生

筑波大学心理学系　高野　清純

The helping behavior of children and its motives.

Yayoi Watanabe and Seijun Takano (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305, Japan*)

The purpose of this study was to investigate the motives of helping behavior in children. Subjects were 37 first-graders and 42 third-graders. In one experiment, children were presented three pictures, each describing two children, one of which was in a state of need. Each Subject was asked whether the non-needy child in the picture would help the needy child. If a subject answered affirmatively, he or she was asked why. The results indicated that chidren's expressed motives for helping behavior change with age. In a second experiment, the relationship between the motives expressed by children and the amount of donation was investigated. The results indicated that children whose motives were of a high level did not necessarily exhibit more helping behavior than the children whose motives were of a low level.

Key words: children, motives, helping behavior, donation.

問　題

ここ数年，アフリカの難民問題が深刻な世界の問題として報道されている．街頭には寄付箱が置かれ，テレビでは毛布の寄贈が求められている．これ以外にも私達の身近なところで援助行動がたくさん行われている．しかし，その反面，車内暴力やいじめなどの反社会的な行動も毎日のように起こっている．

心理学においては，向社会的行動として一連の研究がなされているが，その大半は援助行動に影響を及ぼすと考えられる要因を検討している．年齢や性別により援助傾向が異なるとか状況により援助しやすさが変わるなどの結果が数多く報告されている．これに比較して，「なぜ，援助行動が起こるのか」といった素朴な疑問について直接検討したものはほとんどない．行動と異なり，内的過程である動機を見出すことは困難であるとして敬遠されていたためである．

しかし，援助行動の動機について知ることは，特に幼児，児童の社会化について重要である．援助しようと動機づけるものが何であるかが分かれば，それにアプローチすることで思いやりのこころを育成することが可能となるからである．また，援助行動という行動レベルでの研究は実態の結果報告になりかねない．外見的には援助を行っているようでも単に罰を恐れたり，共感的な苦痛を低減しようとしたり，他人から承認されたいといった動機から生じた行動かもしれない．真の愛他心から生じた援助行動は特に愛他行動といわれるが，行動からではこれとの区別がつけられないのである．

従って，他人の利益になることを意図し，外的な報酬を期待することなく自発的に援助行動を行おうとする愛他心が存在するのか否か，を検討することは道徳性，社会性の教育に有益な資料となるであろう．動機についての研究は数少ないが，Bar-tal et al. (1981) は，こどもが必ずしも愛他心から援助行動を行っていないこと，さらには，動機が認知能力に従って段階的に発達していることを示唆し，幼稚園児（4－5才）と2年生（7－8才）の援助行動の動機を比較した．その結果，幼稚園児は具体的な報酬を期待して援助行動をするのに対して，2年生は互恵的な考えに従がって援助行動をしていることを見出した．そして，これを基に，Table 1のような発達段階を提唱した．この6つの発達段階は2つの次元に基づいている．第1は外発的か内発的かという次元であり，第2は強化が具体的か抽象的か及び強化の存在が明白か，明白でないかという次元である．

Ugurel-Semin (1952) は，こどもが年齢により異

Table 1　Bar-tal の動機の発達段階

段階 1 ：要求や命令，あるいは具体的報酬により，援助行動がとられる。
段階 2 ：権威のあるものに是認を求めることにより，動機づけられる。
段階 3 ：自発的に援助はするが，返礼としての具体的で明白な報酬を受けることに随伴している。
段階 4 ：社会の行動規範に従がうことが，正の強化となり，他人の目に良く映りたいという気持ちがある。他者の立場を理解することが可能である。
段階 5 ：般化的互恵主義。社会のルールを内在化し，社会システムの崩壊を危具し，援助する。
段階 6 ：愛他行動が自発的に行なわれ，他人の為になることが願われている。報酬は全く期待されておらず，それ自体を目的として機能している。

なる分配行動を示し，利己的な段階から愛他心や公正心を重視する段階へと変化することを示している．さらに，Levin, & Beckerman-Greenberg (1980) でも低学年が報酬を期待している者が多いのに対して，高学年では社会的な規範や要請の重要性を認知していることが報告されている．こうした結果から，Bar-Tal の提唱したように，動機にも発達段階が存在することが推測される．また Bar-Tal, et al., (1980) は動機の発達が援助行動，特に寄付行動とどのような関係があるかを検討したが，寄付量が多いものは動機が高い結果を見出している．

Bar-Tal の提唱した段階が，発達段階といえるかどうかには疑問があるが，加齢とともに援助行動の動機が質的に変化することが見出されれば，年齢にふさわしい教育的アプローチが可能となろう．また，援助行動量が動機の質と関連があるならば，向社会的行動を高めるためには，まず動機を質的に高めることが要求されるであろう．しかし，先行研究の様に動機を追試，吟味した研究はほとんどなく，行動そのものをモデリングや帰属を変化させることにより変容しうることを示した研究が多い．これらは，動機が質的に異なることが検討された後にこそ，より有益な研究と思われる．

従って，本研究では，Bar-Tal の発達段階及び研究方法を参照して，児童の援助行動の動機の発達と，その動機がどのような要因と関っているかについて検討する．さらに，動機が変化するのであれば，実際の援助行動とどのような関係があるのかが検討された．先行研究では援助場面として寄付場面が用いられているため，本研究でもそれに倣った．

本研究の仮説は，以下に示される（①から③は Bar-Tal の見出した結果に基づいた仮説である）．

①援助行動の動機は，加齢と共に異なる．

②動機の発達段階が高いものは，寄付量も多い．

③女の子は男の子よりも共感性が高いとされていることから，動機も高い段階にある．

④兄弟数が多いほど，出生順位が早いほど，動機の発達段階が高い．

方　法

被験者　茨城県内の小学校 1 年生37名（男子20名，女子17名），3 年生42名（男子21名，女子21名），計79名．

材料　Bar-Tal (1981) が作成した材料により構成された絵及び物語に修正を加えて，冊子が新に作成された．絵は 3 枚から成り，場面を表わしている．それぞれ，情緒的援助場面（ころんだ子とそのわきに立っている子が描かれている），奉仕的援助場面（雨に濡れている子とそのわきに立っている子が描かれている），物質的援助場面（キャンデーを食べている子とそのわきに立っている子が描かれている）であった．これらは，Fig. 1に示される．絵の中の登場人物と被験者の性が合わせられるように男子用と女子用が作られた．また，後続する質問に対する理解を容易にするため，登場人物の下に名前が記された．場面の選択には，適合性，頻度，受容性が高いと認められているものが用いられた (Foa, 1971)．

手続き　個別に行われた．被験者はひとりずつ調査室に連れていかれた．被験者の前に冊子が置かれ，表紙の該当するところに名前，性別，兄弟数，家族構成を記入させた．その後，ページ順に調査が行われた．調査者は絵を見せながら，絵の場面を説明する物語をわかりやすく読んで聞かせた．物語は場面別に次のとおりである．

情緒的援助場面：たろうくん（はなこさん）とよしおくん（よしこさん）は学校へ行く途中です．後ろから，よしおくんにおいつこうと走ってきたたろうくんは石につまずいてころんでしまいました．

奉仕的援助場面：あきおくん（あきこさん）とみ

上：情緒的援助場面
中：奉仕的援助場面
下：物質的援助場面

Fig. 1　例話の絵（男子用）

ちおくん（みちこさん）は学校からの帰る途中です．みちおくんが歩いているとあきおくんがかさをもたずに濡れて走っているのを見かけました．

物質的援助場面：ゆきおくんか（ゆきこさん）が公園でキャンデーを食べていました．そこへはるおくん（はるこさん）がゆきおくんを見つけてやってきました．

物話が理解されたかどうかが確認された後，登場人物の一方の子が援助を必要としている子に援助をするかどうかが聞かれた．援助すると答えたものには，何故援助行動を行ったのかその動機を4つのカテゴリーから選択させた．本研究では，動機段階としてBar-Tal（1981）が区別した①外発的物質的報酬の期待，②外発的社会的報酬の期待，③内発的外的報酬（互恵）の期待，④内発的自己報酬の期待（愛他心）の4段階が検討された．従って，選択肢は各段階に対応する①母親（父親）からの報酬の期待，②母親（父親）からの賞賛の期待，③困っている時はおたがいに助けあわねばならないという考え，④援助することそのものの喜び，の内容を示す絵から成り，調査者の説明により補われた．また，人を援助することを誰から教わったかという質問が最後に尋ねられた．

上の調査をした数日後，援助行動の実験が行われた．実験は個別に行われた．被験者は実験者と対座した後，ゲームの説明を受けた．ゲームはジグゾー・パズルであり，実験者から合図があるまで，10題のパズルに順次取り組むことが教示された．ゲーム終了後，被験者はゲームに参加してくれたことを感謝され，実験者からごほうびと交換してもらえるチップが与えられた．このチップの数は予め7枚か8枚を与えることが，実験手続きとして決められていた．次に，“かわいそうな子のはこ”と書かれた寄付箱が示され，実験者がかわいそうな子の為にチップを集めていること，そのため，被験者が寄付してやりたい気持があれば好きな分だけ分けてあげて欲しいことが教示された．寄付箱は被験者の見えやすいところに置かれた．実験者は被験者が寄付するところを見ないようにした．寄付数は，被験者の退出後に数えられた．

結　果

年齢と動機; Fig. 2のとおり，学年により動機の分布が異なった．X^2分析の結果，1%レベルで有意であった（$X^2=30.43$, df=3, $P<.01$; $X^2=20.04$, df=3, $P<.01$; $X^2=11.35$, df=3, $P<.01$）．ここでの動機の段階は，1段階が外発的物質的報酬が期待される段階，2段階が外発的社会的報酬が期待される段階，3段階が内発的外的報酬（互恵）が期待される段階，4段階が内発的報酬（愛他心）が期待される段階のことである．ただし，各レベルに人数のバラツキがあるため，Table 2のとおり先の2

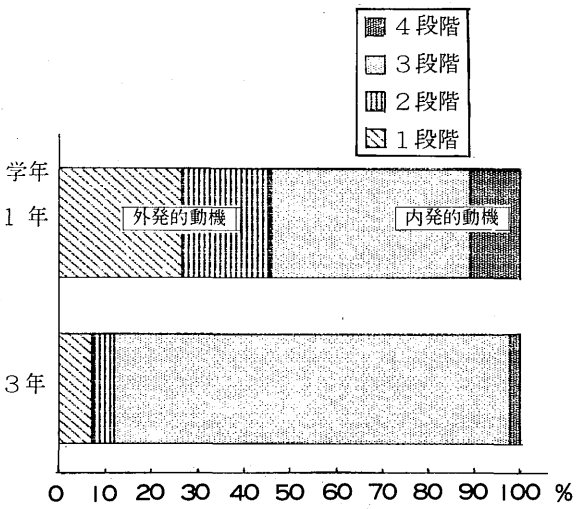

Fig. 2　年齢と動機

Table 2　年齢と動機

第1場面

学　年	外発的	内発的	計
1	19	18	37
3	1	41	42
計	20	59	79

第2場面

学　年	外発的	内発的	計
1	18	19	37
3	2	40	42
計	20	59	79

第3場面

学　年	外発的	内発的	計
1	17	20	37
3	5	37	42
計	22	57	79

数値は人数

つを外発的動機，後の2つを内発的動機として分析したところ，全場面で有意であった（$X^2=24.95$, df＝3, p＜.01；$X^2=20.04$, df＝3, P＜.01；$X^2=11.35$, df＝3, p＜.01）．Table 2の示すとおり，1年生は外発的動機と内発的動機に約半数ずつ分かれているが，3年生では内発的動機が圧倒的であった．特に，3段階の互恵期待に集中していた．場面間の動機の相関が見られたが，総べての場面間に有意な相関が見出された（r＝.26～.45, p＜.05）．性差については有意な差はなかった．

動機と寄付量; Table 3は第3場面（物質的援助場面）における動機別の寄付量を示している．動機の差によって，寄付量に違いが生じるかどうかが検討されたが，有意な差は見出されなかった．外発的か内発的かの違いによっても検討されたが，やはり有意な差は見られなかった．

年齢と性差と寄付量；年齢(2)×性(2)の2要因の分散分析が行われた．その結果，年齢と性の主効果は見出されなかったが，交互作用が5%で有意であった（F＝4.78, df＝1/74, P＜.05）．1年生では男子が，3年生では女子の寄付数が多い傾向が見出された．

兄弟数と出生順位と動機；Fig. 3のとおり，兄弟数と動機との間に有意な関係が見出された（$X^2=4.96$, df＝1, p＜.05）．3人兄弟のほうが1人兄弟よりも内発的動機が多かった．出生順位と動機との有意な関係は見られなかった．

誰から援助することを教わったかという質問に対する答は，Fig. 4のとおり，年齢により異なる結果が見出された（$X^2=6.08$, df＝3, P＜.10）．1年生は「両親から」及び「自分で」と答えるものが多く，3年生は「自分で」と答えるものが多かった．

考　察

年齢と動機；仮説①のとおり，加齢とともに外発的動機から内発的動機へと変化して，援助行動が行われることが明らかにされた．これは，Bar-tal の研究結果と一致するものである．一般に，7才を境

Table 3　動機と寄付量

第3場面(寄付場面)

動　機	0	1	2	3	4	5	6	7	8
外発的	6	7	6	1	0	2	0	0	0
	(27.3)	(31.8)	(27.3)	(4.6)	(0.0)	(9.1)	(0.0)	(0.0)	(0.0)
内発的	18	13	12	5	3	1	1	1	2
	(32.1)	(23.2)	(21.4)	(8.9)	(5.4)	(1.8)	(1.8)	(1.8)	(3.6)
合　計	24	20	18	6	3	3	1	1	2

数値は人数，(　)内は各動機内のパーセントを示す。

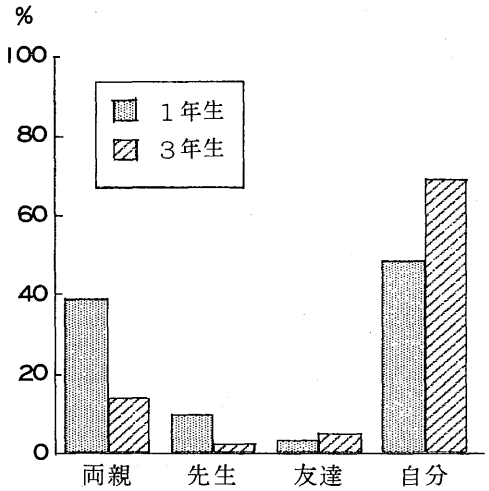

Fig. 3　兄弟数と動機

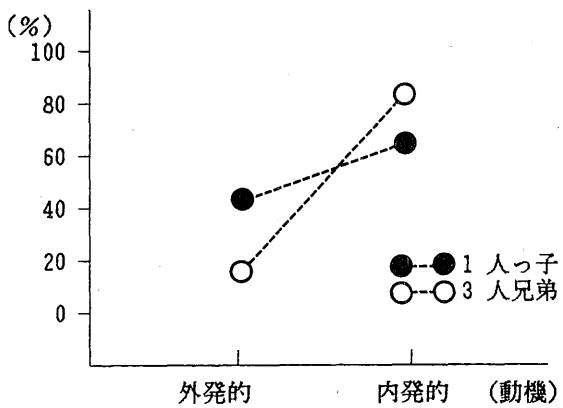

Fig. 4　援助行動の学習

にして，結果論的判断から動機論的判断へと移行し，特に，年長の子（10～12才）の行動は互恵原理に従がうとされている（Piaget, 1932）．従って，本研究での3年生は後者の段階にあり，既に他人との相互関係を考えることができ，社会的な規範を内在化していると考えられる．一方，1年生は自己中心性の脱却過程にあり，依然，外発的な動機しかもてないものと社会的な規範を理解しはじめたものとが混在していると考えられる．但し，1年生という学年は就学前の家庭教育のありかたにより，かなり個人差が現われる時期と考えられるため，環境要因との関りを考慮した研究がなされるべきであろう．

動機と寄付量；仮説②は支持されなかった．動機が異なっていても，寄付量に差は見られなかつた．即ち，動機が質的に高くなっても，寄付量が多くなったとはいえないことが示唆された．これは，動機が必ずしも行動の正確な予測指標にならないことを示唆する．動機の測定は言語表現に依存しているため，社会的望ましさが結果に影響したことも考えられるが，動機と行動との間に状況要因の影響を考える必要があることが示唆される．また，行動測度として寄付量をとったことに問題があるとも考えられる．即ち，児童にとって強く意図されるのは，寄付したかいなかということであって，いくつ寄付したかということと動機の質とは直接結びつかないのではないかということである．

性差と動機及び寄付量；仮説③は支持されず，性差と動機には有意な関係のないことが示された．寄付量については，1年生の男子と3年生の女子に寄付量が多い結果が見出されたが，レンジが大きいことから，一部のものの寄付量の多かったことが数値を引き上げる結果を導いたと思われる．

兄弟数と出生順位と動機；仮説④は兄弟数についてのみ支持された．3人兄弟に内発的動機，特に互恵の期待が多く，1人っ子は外発的動機を選択したものが多かった．兄弟は仲間関係を形成する基本的関係であり，両親から与えられる情報や報酬はすべて兄弟間相互で分配され，決定されるため，自己の立場だけでなく他人の存在を考えた互恵の考えが深く心に内在化すると考えられる．これに対し，1人っ子は両親からすべてのことが与えられ，決定される．やがては，1人っ子も学校等において仲間関係が形成され，互恵の観念を理解するようになるであろうが，低学年においては兄弟数の多いこどもの方が互恵の期待が強いように考えられる．出生順位については，動機に差が見られなかったが，これは長女，次女といっても年齢差が1才と10才ではかなり関係が異なるわけであり，これについて細かく考慮しなかったためと考えられる．今後，年齢差と併せて考えた研究が必要であろう．

援助行動の学習；3年生に比較して，1年生では「両親から」と答えたものが多かった．それに対して，3年生では「自分で」と答えたものが多かった．これは，1年生が外的に権威のあるもの，特に両親に対して従順である傾向が強いためであろう．また，加齢とともに，規範が外からの押しつけではなく自己の中に内在化し，自分で何でもできるという自覚と責任が高まっていくと考えられる．日頃，我々が援助行動を行うことができるのは自分自身の経験からだけではなく，周囲の人から教えられたことにもよると考えられるが，3年生においては特に自分の力というものを誇示したい年齢といえるだろう．ま

た，この傾向は1年生において既に見られはじめている．

総合的考察

Bar-Talの提唱した発達段階の妥当性の検証については，本研究では不充分であるが，動機が年齢により，質的に異なっていることは明らかにされたといえよう．特に，外発的動機から内発的動機へと変化していることが示唆された．これは，共感や役割取得などの認知能力に深く関っていると考えられる．従って，今後，これらとの関係を検討するとともに，対象年齢を増やして動機の発達を検討することが必要である．また，動機が質的に異なることから，教育現場でこどもの向社会性を育てることが意図される場合に，その学年に応じた教育的アプローチが必要であることが示唆された．

動機に影響を与える要因として，性差，兄弟数，出生順位などをとりあげて検討したが，兄弟数についてしか有意な関係が見られなかった．即ち，兄弟が多いほど互恵性が高くなることが明らかになった．先行研究においては，兄弟数や出生順位との関係を見たものはほとんどなかったが，日本においては向社会性を学ぶのに，縦の関係は重要に思われる．なかでも，見過ごされがちではあるが，兄弟は親や友達関係に並んで身近で，親密な間柄といえ，社会的な規範を学ぶうえで大きな影響を与えていることが本研究結果から明らかである．

動機寄付量については，先行研究と異なる結果が見られた．一般に，人は日常「こういう場合はこうするだろう」という予測的動機を持っている．しかし，実際の場面ではそれに反した行動をとることが多いように思われる．これは，動機と行動の間に存在する状況の変化に原因があると思われる．本研究においては，動機の調査された場面と実際の行動場面とが異なったことが，動機と寄付量の結びつかなかった大きな原因かもしれない．今後が状況要因との関連を考慮したダイナミックな研究が望まれる．

引用文献

Bar-Tal, D., Raviv, A., & Leiser, T. 1980 The development of altruistic behavior: Empirical evidence. *Developmental Psychology*, **16**, 516－524.

Bar-Tal, D., Raviv, A., & Shavit, N. 1981 Motives for helping behavior. *Developmental Psychology*, **17**, 766－772.

Foa, U. 1971 International and economic resources, *Science*, **171**, 345－351.

Levin, I., & Beckerman-Greenberg, R. 1980 Moral judgement and moral behavior in sharing: A developmental analysis. *Genetic Psychology Monographs*, **101**, 215－230.

Piaget, J. 1932 The moral judgement of the child. London: K. Paul, Trench, Trubner, & Co. 大伴茂(訳) 児童の道徳判断の発達 同文書院

Ugurel-Semin, R. 1952 Moral behavior and moral judgement of children. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **47**, 463－474.

——1985. 9. 30 受稿——